

流通研究事始め

中 野 安

❖多難なスタート

本誌4号を開いてびっくりした。本「パレット」欄のトップ・バッターは、その豊かな研究業績とともに名文家としても高名な高橋哲雄先生である。つまり巨人の松井とイチローを一体にしたような人である。そのことを知らされていたら、二番バッターをかんとんに引き受けるほどボクはまだ毫碌してないつもりだ。これはきっと、ボクに原稿を依頼するさい、滝沢秀樹所長が意識的に触れなかったのに違いない。

しかも高橋先生の要約によれば、本コラムの「主旨」は「研究生活を振り返って、その節目ごとにおつかった学問や思想、あるいは現実世界の流れと自分がどう関わったか」を、「あくまでも自己の内面とかかわらせ、楽屋話になるのを恐れず、手の内を公開」することにあるらしい。ところが所長から原稿依頼を受けた時はたしか、「研究生活を振り返って感じたことを自由気儘に書け」ということだった。これは日頃尊崇する滝沢先生にあるまじき二重の“だまし”である。それに、「主旨」のようなむずかしいことがボクに書けるわけがない。そこで、首尾一貫させるために（もともと頑固である）、内容についても“だまされた”ままとする。

さて、本稿のスタートと同様、ボクの研究生活のスタートもまた多難であった。

現在のボクの研究対象は、大分類では流通論（マーケティング論や商業論を含む）ということになるが、「コア事業」は19世紀末から現在までのアメリカ小売業の実証研究である。なぜそうなったのか。理由は、いささかも高邁な精神に基づくものではなく、半分以上は世俗的かつ偶然による「転進」のせいである（この低俗性がまた、「先生方にとって何の参考にもならないのではないか」と、本稿の執筆意欲を減退させる）。

❖就職による「転進」の強要

修士（東大院）2年の時、学部（香川大学）時代のゼミの指導教授であった橋本勲先生が京都大学（経）へ移られたのに伴い、「後任として香川大学（経）へ来ないか」という話があった。多少迷ったのであるが、大学院の先輩たちや院ゼミの指導教授（宇高基輔先生）と相談したすえ、当時（1962年）の院生の就職難を踏まえ、結局OKすることにした。

ところがそこには2つの難問が待ち構えていた。第1は、橋本先生の担当していた流通論の後任なのに、ボクはそれまで流通論などまったく興味がなく、研究したこともなかったことだ（後述）。しかしこの点については恩師も、その専門研究領域がマルクス経済学の原論と流通論の二本立てであったから、ボクもそれまでの研究からの方向転換などという意識はあまりなく、『『資本論』3巻4篇16～20章を中心とする商業資本論くらいならすぐにでも講義できるだろう』と半分はのんきに構えていた*。事実、その頃までの大学にはのんびりしたところがあって、たとえば、のちにマーケティング論や商業経済論で画期的業績をあげた森下二次也先生は統計学で採用されたそうだし、担当科目ないし講座と本当の専門研究分野との違いは珍しいことではなかった。ところがまもなく、これがとんでもない間違いであることがわかる。それは次の第2の難問にかかわる。

*それに加えて、90分のうちほとんどが雑談（映画論や文学論等）であった先生の講義を受講した経験が“さいわいして”、講義については「何とでもなる」と思っていた。

当時、香川大学（経）では——修士修了採用が一般的であったせいもあり——助手採用時には執筆論文がなくてもよかったが、その代わり、助手期間1年のうちに講師昇格審査を受けなくてはならなかった。そしてそのためには、印刷等の技術的理由から、採用後約6カ月のうちに論文を最低1本執筆する必要があった。当時ボクは、修士1・2年時の「経済変動論」（玉野井ゼミ）の報告を中心にまとめた科研の共同研究の1論文（玉野井芳郎編『大恐慌の研究』東大出版会、1964年）があったから条件は充たすものの、それは「建築活動」にかんする論文であり、どうしても担当の流通論に近い領域の論文を執筆しないと審査上まずい、と判断した。そこで急遽、流通論関連の論文を1つ“デッチあげる”ことにしたのである。

この頃から日本でも、大学における教学体制の整備や学問の専門分化のいっそう急速な進展がみられ、研究者における担当科目・講座と真の専門研究領域との分離は解消傾向をたどったから、上記判断は正しかったわけであるが、ボクはそうした巨視的見通しのもとに判断したのではない。ただ小心だったからそうしたに過ぎない。

しかし、それまでまったく関心がなく*、したがって研究蓄積ゼロの流通論の領域で、わずか6カ月のうちに論文を1本まとめることができるのか。「転進」によってすぐ直面した重大な「危機」はこれであった。

*この領域に関連して学部時代、2冊だけ読んだ——1つは、授業科目「市場論」のテキストであった松井清『商業経済学概論』（1952年）である。当時は主として、理論的関心が強かった恐慌論的側面からチェックしたが、同書はどうても読むにたえる水準ではなかったし、商業経済論としてもマル経の原論からの

◆パレット◆

明確な分化・独立がなされておらず、実質的には原論の付論であった。

もう1つは、森下二次也編『商業経済論体系』（1959年）である。本書の執筆者（ほかに森下、山本朗、風呂勉、荒川祐吉等）の1人でもあるゼミの橋本先生の薦めによって入手し、ていねいに読んだ。名著といってよい同書の画期的意義は何年かのちにわかってくるのであるが、今でも鮮明に記憶しているのは風呂、荒川（源泉は森下論文）の2論文がきわめて思考刺激的だったことと同時に、まったく違う学問世界を初めて提示された戸惑い（「へえー、こんな分野があるのか／こんなアプローチがあるのか／こんな切り方があるのか」）であった。あとから振り返れば、それは抽象的な理論しか知らない者が、驚くほど多彩な現実のマーケティング活動や、独占段階において大きく変容した商業にかんする見事な分析を示され、圧倒されて混乱状態に陥ったということだろう。いってみれば、深海の生物が急激に海面（現象世界）に浮上し、環境不適應により仮死状態に陥ったようなものである。しかしこれも、卒業間際のちょっとした波乱であって、やがて忘れていった。この時のツケが上記のような形でやってくるとは、アンラッキーというべきか、因果応報というべきか。それにしても「滞納中」の利子が高すぎた。

◆アメリカ小売業研究へ——「危機」における合理的行動

もともとボクは、学部時代は主としてマルクス経済学の理論を学んでいた（学部における経済学関係の講義の大半は近代経済学系だったが、その勉強についてはここでは触れない）。ゼミのテキストは——M.Dobb, *Political Economy and Capitalism* (2nd ed., 1940) ; P.M.Sweezy, *The Theory of Capitalist Development* (4th ed., 1956) ; R.Hilferding, *Das Finanzkapital* (1910) のドイツ版に付けられた長文のEinleitung部分（誰が書いたのか調べる余裕がない）；A.Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels*, 2 Bde. (1954~62) の1部分（青年ヘーゲル派の頃の数十ページ）。大学院でも、半分以上はマル経の理論の訓古学（*Theorien über den Mehrwert* [Werke, Bd.26] の恐慌論関連叙述の多い分冊や『経済学批判要綱』）をやっていた（すべてドクターとマスターが一体で、ゼミ形式）。

こういう思考慣習のところへ、流通論研究がいわば突然侵入してきて「すぐ成果を出せ」と要求したわけである。最終的には自らの決断により就職することにしたとはいえ、研究面では突如「黒船」が現れたような感じに陥った。

しかも、もう1つの圧力が加わる。恩師や先輩の若手研究者の何人かが「最初の論文のデキいかんによっては、以後の論文は見向きもされなくなるよ」「新聞記事のような論文はダメだ。泡沫論文は書くな。少なくとも30年以上は学問的価値を失わない

ようなものを書くようにしろ」と脅したのである。当時のボクはまだ純情であったから、まじめに受け取ってしまった。

さて、この「危機」に直面して採った行動は、ボクとしては——いささか学問的高邁さに欠けるが——人生における数少ない“合理的”行動の1つであった。それを説明するために、大学院での研究のもう1つの側面に触れておく必要がある。

大学院では、マル経の訓古学と平行して、留学から帰国直後の玉野井先生のもとで1920・30年代のアメリカ経済の研究をやっていた。最初は先生がアメリカの主要研究を紹介したりしていたが、やがて10人余の院生（ドクター、マスター混在）に担当分野が割り当てられ、本格的共同研究に発展した。ボクらは「こき使われている」ように感じられて一面では文句をいいながらも——その時ははっきり自覚していなかったが——アメリカ経済の魅力（ダイナミックな変化、経済的重要性等）、アプローチの新しさ、共同研究という新しい研究形態から得られるものの大きさ等に魅きつけられていったのである。

「危機」に直面してボクは、玉野井ゼミでの修士2年間の研究蓄積を利用しない手はない。あるいは、それを利用しないとロクなものしか書けないだろう、と判断した（商業資本論では、講義はできて、まだ論文を書く自信はなかった）。換言すれば、「新規事業分野」への進出にさいし、きわめて乏しいとはいえ利用できそうな既存の「経営資源」をかき集め、フルに活用しようとしたわけである。これは貴重な青春期をムダにせず、知的投資効率を高める可能性を追求したのだ、ともいえる。

このようにして、時間に追われるような形で20世紀初頭から1930年頃までのアメリカ小売業の実証研究（これには宇野理論の影響がある）に取り組み、流通論関係の最初の論文を“デッチあげた。”

脚注をみれば「読むべき論文かどうかの第1次判別ができる」といわれるが、この論文は多分、失格となろう。なぜなら第1に、当時流通研究が比較的好く掲載されている有力雑誌としては*Harv. Bus. Rev.*、*Jour. of Bus. (of the Univ. of Chicago)*、*Jour. of Retailing*、さらには*Fortune*の4誌があった（30年代後半からは*Jour. of Marketing*が加わる）が、*HBR*は総なめしたものの、その他はいっさい利用していないからである。時間的に手が回らなかったのに違いない。第2に、とうぜんともいえるが、引用文献が玉石混淆だ。

◆偶然の重なり——エンジン点火と相対化の途へ

かくして赤面ものの論文となったのであるが、インスタント食品じゃあるまいし、学問研究において成果をあげる困難さは充分承知していたので、助手期間から講師初期にかけての1年6カ月、引き続き東大で、何の義務もない研究三昧の国内留学生活

◆パレット◆

を送った。あとで振り返るとほぼ毎日、十数時間を研究に充当できた20才台半ば頃のこの短い期間が、流通研究にかんしては最も研究が進展した期間であったように思う。文献・資料的に断然充実していた東大経済学部附属図書館、一橋大図書館（下宿の近くであり、友人の院生を通じて利用した）、国立国会図書館（玉野井先生をつうじて特別閲覧カードを入手していた）を利用できたのも、それに寄与した。

結局、こうした学問的情熱を引き出したことが、この論文の意図せざる最大の効果であったように思われる。つまり、学問外的考慮による“デッチあげ”論文として着手したのが、しだいにその研究の魅力に取り付かれ、約40年もの長期にわたる研究を推進するうえで不可欠な、デモニーッシュともいえる学問的情熱（＝エンジン）に点火されたのである*。たとえば悪いが、親から押し付けられた見合い結婚の女房が、しだいに好きになり、愛するようになって一生連れ添うようなものである。

*それはいいかえると、知的好奇心を強く刺激され、かつ「研究者として、ささやかとはいえ一定の、独自の学問的貢献ができる」、との“幻想”がもてたということでもある。仙人がかすみを食って生きているように、研究者はこの“幻想”なしには生きていけない。だが、加齢につれてこの“幻想”が薄れてくる。それはつらいことである。しかし、バルタザール・グラス（バルザック『「絶対」の探求』）や中藤沖也（山本周五郎『虚空遍歴』）のような悲劇だけは避けられそうだと、自らを慰めるほかはない。

なお付言すれば、全人格を賭した研究対象の発見（エンジン点火）の時期は、人によってさまざまでありうるし、そうした対象が複数であったり、時間を経るにつれ変化することもありうる。ただし、対象が多すぎるのは疑問だし、流行の変化を追うがごとく変化しすぎるのもボクにはなじめない。ぎゃくに、この急激に変化する時代にあってもなお、若い時のテーマをひたすら追う人たちについては、1) 畏敬の念を抱く人、2) 陳腐化したテーマについて“ようやる”としかいいようのない人、の2種類がいる。

しかし、そうなったのには別の歴史的要因も作用している。それは、取り組んだのが日本では比較的未開拓ではあったが——それまで重視されていた農業分野に取って代わるかのように——急速に重要視されるようになっていった流通分野だったことである（林周二の『流通革命』〔中公新書〕がベストセラーになったのが1962年）。ただ残念なのは、「たまたま」そうなっただけで、学問的先見の明があってこの研究対象を取り上げたわけではないので、自慢できないことである。

このように、アメリカ小売業研究に多大のエネルギーを注ぐようになるのに反比例して、マル経の理論的研究のフォローからはしだいに遠ざかっていった。これも、ボクにとって結果的にラッキーであった。

これには2つの要因が表裏一体の形で作用している。すなわち、学問研究の専門分化の急速な進展のもとで、自分の拠点（ベース）をできるだけ早く確保する（自立した1人前の研究者になる）必要があり、それを志向する過程で、心底「凄いなあ」とか「なるほど」と感心する数かずの研究に接した（専門分野外ではなおさらそうだ）。このようにしてしだいに、人類の知的進歩は多様な人びとの共同事業として成し遂げられるのであって、中長期的に特定の学派（スクール）のみが担えるなどという、そのスクールにとってだけハッピーな考え方からは解放されていった。つまり、きわめて複雑で、しかも絶えず変化する現実を基本的に、1つの思想や理論によって捉えようとア・プリオリに考える状態（「マルクス目」をとおして現実を見る状態）から——できるだけ幾つかのメガネを使いながら、したがってまたできるだけ相対化し、可能な限り複眼によって現実を見る方向へ——当初はデ・ファクトに、ついで意識的に脱していったのである。

もちろんボクも初めは、マル経の理論的成果を現状分析に利用できるならばそうしたいと思ったのであるが、独占理論関係で2～3利用できたほかはほとんど不可能であった（だからボクは、印刷された論文で一度もマルクスやレーニンを引用したことがない）。その原因は、1つには、マル経のカテゴリーが適用できない現象レベル、あるいは新しい問題が群出している領域を研究していたからだ（「立地条件」のよさ）。2つは、マル経の衰弱にある。その大半は1960年代以降——国民経済の順調な発展期に、制度化された反体制的経済学がしばしば陥る1形態なのだろうが——現実が提起する緊要な問題から逃避し、学説史分野の肥大化、佐藤金三郎に代表されるシャーロック・ホームズばりのマル経の形成過程の追跡研究（回顧論）に陥るか、あるいは訓古学化ないし古典芸能化するか、あるいは抽象的な論理学に転落していったように思う。あるいは宇野派のように、「勝利」のゆえに傲慢となり——ある時期までのマルクス派と同様——懐疑を欠如させたために創造力を失い、急速に失速した。

◆最良の業績との格闘と「立地条件」

この時期、周囲に同じ対象を研究している同業者が1人でもいれば、相互批判をつうじてもっと効率的に、かつ良質の研究ができたのに、残念ながら当時は（その後数年間も）まったく1人で、闇夜に手探りの状況であった。この点では、近くに同業者の多い神戸大学や京都大学の若手研究者を大変うらやましいと思ったものである（その後、佐藤肇の名著『流通産業革命』〔有斐閣、1971年〕が出る）。

それでもなお、問題意識と取り上げた研究対象の点で大きく道を踏みはずさなかったのは、それまでのアメリカ経済研究でえた「土地勘」をひとまずおくとすれば、当時、断然突出し、圧倒的影響力を与えた森下（『現代商業経済論』〔有斐閣、1960年〕）、

◆パレット◆

荒川（『小売商業構造論』〔千倉、1962年〕）両教授の学位論文（理論的）に胸を借りたからだろう。

多分1963～64年頃と思われるが、上記2著に本格的に接した時、ボクは一面では大変感銘をうけると同時に、最高の発展段階と規定する産業独占、商業独占、銀行独占のスタティックな三位一体支配論に強い違和感というか疑問を抱いた（ただし、両者には若干精粗の違いがある）。そして「これらを、実証研究をつうじて根本的に批判してやろう」と思った。そして、よせばいいのにそのことを、1965年10月に書いた論文で宣言してしまったのである。今振り返ると、神様を批判したようなもので、若気の至りというほかはない。

しかし、何の抵抗感もなくそういうことができたのは、属していた「文化圏」あるいは学派（スクール）が異なっていた——あるいは、どの「文化圏」にも属さない一匹狼だった——からだろう。恩師の橋本先生は、森下・荒川先生を中心とする大きい「文化圏」（その下に幾つかのマイナーなそれがある）に属していたが、ボクはそれとは完全に無縁であった（のちに少し関係をもつ）。一定の距離をおくと確かに、遠慮なく批判できるメリットがある。あるいは、近くで強烈な学問の後光（威信）にさらされると批判的精神を喪失したり、弱点が見えなくなってしまいがちだ。この点でも、たまたまだが、ボクは「立地条件」がよかった。

これに関連してさらにラッキーな点があった。それまで面識のなかった森下先生が——学問研究の視点を最優先されたからだろうが——異端派のボクに対してもじつに寛容で、『マーケティング経済論（下巻）』（ミネルヴァ書房、1973年）に「マーケティングの生成」を書く機会ばかりでなく、72年に大阪市立大学（経済研究所）へ移る機会さえ提供してくださったのである。

◆アプローチの多様化と文献・資料

初めて商業学会に出席した頃のこと（1963年ないし64年）であるが、のちに有名となるK大の某教授が、アメリカの最新の潮流を紹介しつつ、マーケティングにおけるインターディシプリナリー・アプローチの必要性を強調し、物理学、生物学、数学に始まり、文化人類学、社会学、etc.の成果を積極的に採り入れるべきだと力説した。それを拝聴した時ボクは、“エライ分野を専門にするハメになった”と慨嘆したものだ。ところがさいわいにも、その先生はそうしたアプローチを一向に現実に応用しないばかりか、すっかり忘れたふりをされたので、ボクも苦勞しなくてすんだ。

しかし、研究に沈潜するにつれ、必要に迫られてしだいにまず産業組織論、独占禁止法、経営史、経営学（組織論と戦略論）等の成果を採り入れるようになった。それはボクだけのことではなく、かなりの数の流通論研究者がそうだ。こうしたことが起

こるのは、一方では、対象そのものの複雑性と急速な変化によるし、他方では、認識主体たるわれわれの側における理論と関心の変化のためである。

この双方が作用していつまでたっても忙しいし、達成感がもてない。ということは、別の面から見れば、研究者自身がたえず、以前にもまして陳腐化の危険にさらされている、ということでもあるのだろう。

文献・資料にかんしては、小売業分析に関連して比較的早く、広範に両院の司法委員会や中小企業委員会、その他の聴聞会記録、連邦取引委員会(FTC)の調査報告を利用したり、アメリカの法学雑誌の論文に着目し利用し始めたのはボクが最初だろう(最高裁附属図書館も利用した)。たとえば、当時最大の小売企業にかんする100ページ余もの大論文は、*Univ. of Pennsylvania Law Rev.*, Vol.99, No.8 (June 1951)に掲載されている。ついでにいえば、こうした経済・経営的分析における法学者(とくに独禁法専攻)との交流・協力(そこからさらに新しい、創造的な仕事ができるはずだ)という点では、日本はまだまだ不十分だ。次世代の課題だろう。

また大手企業のアニュアル・リポートの広範かつ系統的利用の点でも、後藤一郎教授(大阪経大)とともに、先頭を切ったほうだろう。それは、1980年代初め大阪市立大学が——野村證券元社長瀬川さんの寄付により設立した基金の運用果実から——1,000万円を投じてアメリカ大手企業数百社(うち小売関係は20社ほど)の、創業(法人化)以来のアニュアル・リポート(株主向け。マイクロ・フィルム版。1981~85・86年はマイクロ・フィッシュ)を購入したおかげである。それはボクの研究を大きく刺激した。

しかしつらい点は、その文献・資料がいかに貴重なもの、第1級のものではあっても、それによりかかって良い作品(研究)ができるのではないことだ。問題意識を磨き、分析ツールを考案したり取り揃えなければならない。ストーリーの展開(論文構成)にも工夫が必要だ。ところが、両者が乖離したり矛盾したりする危険性も少なくないのである。それに加えて、貴重文献・資料の収集とその利用が時間的に乖離することも少なくない。たとえばボク自身、上記アニュアル・リポートにかんしては、購入後20年も経過しているのに、小売関係の利用企業はほんの10社余にとどまっている。つまり「タンス預金」が多いのである。だから、文献・資料収集に力を入れ過ぎるのも、研究生産性を低下させる恐れがある。心すべき点だ。

❖日暮れを間近にして…

「傑作を生み出したのは原稿の締め切りの存在」という名言があるが、ぎゃくは必ずしも真ならず、というところがつらい。締め切りに脅迫され、いやいやながら、諦めて原稿を引き渡してきたのが実情だ。だから、「論文とは諦念の上に書かれたもの」

◆パレット◆

ともいえる。ジャコメティによれば（矢内原伊作『ジャコメッティとともに』筑摩書房、1969年）、芸術には永遠に完成というものはなく、ただ全体として真実に少しずつ近づいていっただけだそうだ。芸術ではないがボクの場合も、永遠に未完の意識（あるいはトルソー意識）が強く残っており、真理に近づいているとの意識はもちにくい。

そこで、これまで書き散らかした「恥の集積」の責任をとり、ある程度の総括をしたい気持ちが強い。またそれをしないといけない人生の夕暮れ時に近づいている。にもかかわらず、エネルギーが減衰してしまってその作業がさっぱり進展しない。これが現在の最大の悩みである。しかし、たとえ総括ができなくとも、また自分の研究の間違いが次つぎと明らかになっていったとしても、次世代の研究者たちによって多少とも論文が参照されるならば、それで充分満足すべきではないか、と自らを慰めている。

* * *

“1年半のサバティカル・イヤーをやろう”——ある日、事務当局からそんな知らせを受けて、「まさか?!」と、強い疑いの目を向けているうちに、突然目が覚めた。その日は、午前9時半から6つの会議が待ち受けている日であった。